

十勝岳だいのんか

～未来へつなげよう～

sample

制作・読みさせ会ムーミン 絵・菅井茂樹

十勝島だいふんか

～未来へつなげよう～

みなさん、かみぶりの町のはじまりです。

それは今から 百年以上も前のことです。

遠く三重県四日市の港を出て、船のりつき

やっとの思いで小樽の港につきました。

ここからは、石炭をはく屋根のなら

貨車にのって、歌志内についたのです。

せんばつたいの田中常次郎という八人は、

空知川からぶらの川を上流にすすみ、

苦勞をしながらぶらの原野にたどりつきました。

その日は明治三十年四月十一日でした。

四月なのに広いぶらの原野には

まだ雪がのりつて

「おおお、寒く寒く…」

「おれたちはひどく寒いに来たようだ」

あまりの寒さにこじこじはもなへ、

八人は歩きつづけたのです。



「まだつかないのか…」

「もう無理だ…」

「もう少したーがんばろう」

おたがいに励ましながらか歩きつけ、

西三線北二十九号百七十五番地に

たどりつきました。(今の草分地区です)

一面力ややススキがおいしげる原野、

その中に立つ一本の木、それがにれの木でした。

「ああ、やっとついたぞ=」

「良かった、良かった」

「いづがおれたちの夢をかなえるところだな」

無事にたどりついたことをよろこびあいながら

八人は、にれの木のもとで野宿をしました。

この時から、わたしたちかみふらのの

歴史が始まりました。



その後、つぎつぎと家族もとうちやくしました。

ついで休む間もなく、オノヤノ「ギジ」で

木を一本一本切りたおすことからはじめました。

気候もまったくちがうからの原野の開拓は、

本当にきびしかったです。

「むじろといろに來ってしまった」

「でも帰るといろはなごよ…」

「家族みんなでがんばるしかないね」

食べものはすべて旭川まで二日がかりで

買いに行き米は高く買って買えないので、

イナキビやアワが毎日の食べものでした。

生活はくるしく、大変でしたが、

家族みんなで力を合わせてはたらきました。

三年後、

ようやく生活できるだけの作物がとれるように

なったのです。



明治三十二年には、かみふらのから美瑛まで
鉄道がとおり、本当にへんりになりました。
休むまもなく毎日はたらいっていました、
そのころの一番の楽しみといえば、
運動会と夏まつり。

このときだけは、家族みんなで楽しみました。
開拓者の大変な努力によって、
ふるさどがきずかれてきたのです。
遠くにそびえる十勝岳にいつも見まもられ、
はげまされ、勇気をもらいました。

しかし、その十勝岳に何かがおきていることを
村人たちは感じていました。



sample

一週間も雨がふりつづき、

不気味な山鳴りは日まじに強くなり、

「こんな山鳴りをきいたことはなかった」

「何かおこらなければいらいが…」

村人たちは不安のなか、

畑しごとをしていました。

大正十五年 五月二十四日

朝から山鳴りが「ゴー!!ゴー!!」となりひびき、

「これは山がばくはつするかもしれんぞ」

「ぞつなれば水が出て、」

山津波になるんじゃないか」

村人たちはよかんしました。

そして昼すぎ、

「オオオオオ…!!!」

小さな爆発がおき、

しほしく山鳴りがつづきました。



午後四時ごろ、とつぜん

「コッコッー・コッコッオオッ…ドッカーン!!」

とはげしく大地がゆれ、十勝岳が大はくはつした。

マグマが吹き上がり、

真っ黒なけむりとなって天たかくまいあがった。

ちかくの平山硫黄鉱山で

はたらく人たちは叫んだ。

「やまがはくはつした」「山津波がくるぞ!!」

「にげろーにげろ!!」「にげるんだー」

はくはつで噴きだした溶岩が雪をとかし、

大きな泥流にかわった。

平山硫黄鉱山ではたらく人たちは、

小屋から逃げることができず、呑みこまれた。



泥流は最大四メートルもの高さになり、
すさまじい勢いで日新尋常小学校へとおしよせた。
何とも言えない耳をつんざく

「!!!というものすごい音」

とつせん、目の前におしよせてきた泥流!

「何か来た!!!」にけれーにけれ!!!」

「早くにげるんだ!!!」

そのとき、学校の横手に泥流がげきとつし、

「瞬で教員しゅうたくと校舎をのみこんだ。」

みんなむがむちゅうて山手に向かつて走ったが、

何人かは泥流にのみこまれてしまった。



泥流ははくはつからわずか二十五分で見つらの原野へ。

岩や木々をまきこみ田畑に広がり、線路をめぐりあげ

家をはかいしながらある家族をおそった。

「大変だ!!」

「みんな逃げよう!!早く!!早く!!」

子どもがおそろしさのあまり動けずにいると、

近所のおじさんがせおってくれた。

「早く!!早く!!早く!!」

おじさんは何度もころびながら、

それでもせおって逃げてくれた。

そのとき、おばあさんが叫んだ!

「かへせえ!!」

叫び声にふりかえると、流れをかえた

泥流にのみこまれ、

おばあさんの姿は

消えてしまったのです。



泥流どろながりからのがれて助たすかった村人むらびとたちは、

きょうふと不安ふあんをかかえながら

夜よを明あかしました。

夜よが明あけて村人むらびとたちが見みたものは、

あの豊ゆたかな畑はたけも田たんぼもいぢめん泥どろの海うみでした。

「せう、おわりだ」

泥流どろながりと流木りゅうぼくにうまってしまった村むらの姿すがたに

「これからどうすればいいんだ…」

村人むらびとたちは言葉ことばもなく、

ただぼうぜんとしていました。

この災害さいがいで百三十七人がなくなり、

また馬うまや牛うしなど多おほくの家畜かひくも

うしなってしまうました。



「悲しんでばかりもいられない」

「自分たちでやれることをやる」

「みんなで助けあおう」

三十年間ふるさとを築いてきた村人たちは

ふたたび動きだしました。

いそいだのは鉄道の復旧で、

大被害のつぎの日から作業をはじめて、

二十八日のおひるには開通しました。

しかし、泥流被害の大きさに

自分たちだけで元にもどすのはむずかしく、

元の田畑にもどしたいと言っ人たち、

もう元にはもどせないと言っ人たち、

村の意見は二つにわかれました。



反対者は

「泥と流木をどりのぞくのに、

たぐさんのお金がかかるぞー」

「鉱毒が強くて作物なんてそだたなら」

「復興はぜったい無理だ!!」

しかし村長の吉田貞次郎は

「この土地を捨てたのでは、亡くなった人たちに

申しわけがないーやれば必ずできる!!」

北海道庁の人たちが災害のようすを

調べにきたとき、

「私たちはこの土地を見ずることは

絶対にできません。石にかじりついても

元の土地にしたいのですー

どっか力を貸して下さい!!」

涙を流してたのみました。

吉田貞次郎の村をおもつ熱意が

じつじつ北海道庁や国をも

復興へふみきらせました。





「この土地にみどりをよみがえらせたい!!」

「もう二度やる!!」

「もういちど、開拓をやりなおすんだ!」

いちばん大変だったのは田畑の復旧さぎょうでした。

鉱毒をふくんだ泥は深さ二メートル五十センチもあり、

いろいろな方法で泥をとりのぞく作業をすすめましたが、

「復興はふかのうだ!」三十年はかかるだろう」

言われつけました。


だが、先人から受けついだ開拓たましいは、

十年たらずの年月で

ふたたびみどりの田畑をよみがえらせました。

吉田貞次郎村長は復興の父をよばれ、

かみふらのの歴史につづられています。



とみちだけ
十勝岳は大正十五年の大噴火のあとでも、恐ろしくて怖いだけではありませんでした。

わたしたちは…

十勝岳からたくさんの宝物をもらいました。

雄大な美しい風景。

豊かな大地のめぐみ。

たくさん命が生まれ、

いろいろな植物がそたち、

きれいな花が咲きほこり、

大自然のめぐみがあふれています。

火山活動かざんかつどうによってつくられたアカエゾマツもりの森。

みどりあざやかなアカエゾマツは

町の木まちのきに認定ひんたいされています。

また、忘れてはならないのが温泉おんせん。

温泉おんせんも火山活動かざんかつどうによって生まれたのです。

北海道ほっかいどうでいちばん高いところにある十勝岳温泉とがちだけおんせん。

「あゝあ、いい湯ゆだねえ〜」

「身みも心こころもくちやされるぬ」

「ジャハハハ…ジャハハハ…ジャハハハ」

温泉おんせんのぬくもりにくちやされて、

人々ひとびとの心こころもやさしくなりました。

ふるさとを見みまもる十勝岳とがちだけから、

土つちにも、水みづにも、緑きよにも、

大自然だいしぜんのめぐみが伝つたわっています。



おか
丘にはリベンダーや、

つみ
色とりどりの花が咲きほらつてます。

みひゃく
「かみふらのの魅力は景色がいらいとろろだね」

とがちだけ
「十勝岳の紅葉、あざやかだね」

「かみふらのにはホップもあるよね」

らた
「ビールに豚サガリがねらららららららららね」

なつ
夏の「四季彩まつり」は豊作をねがい

ヨイヤサー、ヨイヤサー、ヨイヤサー、ヨイヤサー！

らん
かけ声とともに行灯がねりあるきます。

おお
大みそかは安全をねがう「北の大文字」

ひ
日の出山にかがやく「大」の文字と冬の花火には、

おおぜい
大勢の人たちがおとすれ、

しんねん
新年をむかえるイベントになっています。



今、ひときわ大きく見える十勝岳。

おだやかな姿で噴煙を上げながら、
子どもたちのすこやかな成長を見まもっています。

ときにはやさしく、

ときにはきびしい十勝岳によりそい
私たちはあゆんできました。

朝日にかがやく十勝岳、
夕陽にはえる十勝岳、
かみふらのみんなのほごりです。

開拓と復興の歴史からまなび、
私たちは現在のしあわせに感謝し、

かがやく未来につなげて語りついでていきます。



いしだえほん No.0071

十勝岳だいふんか

～未来へつなげよう～

2018年10月17日 初版発行

作 読みきかせ会ムーミン
絵 菅井茂樹

印刷・製本・発行 石田製本株式会社
〒063-0836 北海道札幌市西区発寒16条14丁目3-31
TEL 011-676-4520
<http://i-bb.co.jp/>

sample

©2018 Yomikikasekai Mumin / Shigeki Sugai / Ishida Bookbinding

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁はお取り替えいたしますので、弊社までご連絡ください。

ISBN978-4-909377-70-8

石田製本の直販サイト「いしだえほん」にて、
シリアスな物からシュールな物まで、楽しい絵本が続々発売中です！
<http://p-books.jp/ehon/>



9784909377708

ISBN978-4-909377-70-8
C8771 ¥1200E

定価：本体1,200円+税



1928771012000